

# KALS NEWSLETTER 65

2022年8月  
九州アメリカ文学会  
事務局 福岡大学人文学部 大島由起子研究室  
福岡市城南区七隈8丁目19-1  
〒814-0180

## 方言と島唄とアメリカ文学

竹内勝徳 (鹿児島大学)

5月の総会でお認めいただいたように、今年度より九州アメリカ文学会(KALS)の会長を務めます鹿児島大学の竹内勝徳です。会員の皆様の研究が発展するように全力を尽くして取り組みますので、どうぞよろしくお願いいたします。本学会は日本アメリカ文学会の九州支部として位置付けられていますが、ホームページにも記載されているように、本部よりも4年早く発足しています。これまで多くの先達の皆様が作り上げてきた伝統を継承しながら、新しい世代へと結び付けていけるよう努力したいと思います。

さて、私は福岡で生まれ福岡で育ち、1992年に鹿児島大学に着任しました。私の両親は五島出身のカトリック教徒であり、よく「あよー」「あよなー」という五島の感嘆語を使っていました。一方、私は博多弁を主要方言として習得しましたが、今では他の地域の方に親しみを表現しようとすると鹿児島弁が不意に出てくることに気づきました。「・・・ですがよ」(=「・・・ですよね」)、「じゃっど」(=「そうですよ」)など、普段全く使わないボキャブラリーがとめどもなく発せられ

るのです。方言は口語であるため、音として耳から習得してきた結果、自分でも気づかぬうちにコードスイッチングが起こったのだと思います。

鹿児島本土とはまた違った方言の例として、奄美群島の島唄があります。島唄は人々の暮らしから、人生の苦しみ、そして恋愛など、島での経験を題材として歌い継がれてきたものです。若い世代にも受け継がれており、今では島唄教室やコンテストが人気を博し、関西や関東に就職した人たちがそこで島唄を広げ、帰郷してコンテストに出場するという流れもできているとのこと。元々、島唄は「唄遊び (ウタアシビ)」という掛け合いの中で歌われてきたもので、その生成過程はヴァナキュラーな生活環境と一体化していました。しかし、その島唄が広い地域に浸透し、おそらくはコードスイッチングを伴う中でさらに活性化しているのだと思われます。

私は、このような言語の本質を人の声の中に問う姿勢が、アメリカ文学、特に 19 世紀のアメリカの文学者にもあったのではないかと、強く感じています。例えば、ソローの『メインの森』では、ジョセフ・ポリスという先住民のガイドが登場します。ポリスは度々フクロウなど鳥の鳴き声を真似るのですが、ソローは探索の道中で山の名前、川や湖の名前、植物の名前、鳥の名前など、あらゆる名称を先住民の言語でポリスから学ぶのです。そのスペルの多くは地図上の表記とは異なる、つまり、ポリスの声をアルファベットに移し替えて再現しています。ポリスにとってメインの自然は彼の生活そのものであり、彼が発する声はその生活から湧き出てくるものであり、その声を再現しようとするソローは、ポリスという存在を自分の中に馴染ませようとしているように思えます。メルヴィルのマーケサス諸島での言語体験や、トウェインがハックに黒人英語をしゃべらせたというシェリー・フィシュキンの説も同じような構図で理解できます。口述的な文学の創作は一連の潮流を形成し、アメリカン・ルネサンスという枠を突き破っていったのではないのでしょうか。

方言や言語、そして、それらについての意識が変容を伴って発展するプロセスは、研究の発展と似ている部分もあると思います。私は鹿児島という九州本土の最南端で、その島嶼域の南端に位置する奄美群島を意識する中でアメリカ文学の展開について考えました。翻って、九州アメリカ文

学会は、福岡から沖縄まで南北約 1000 キロの広大な地域を拠点としており、九州以外の地域に住んでおられる会員の皆様も含めて多様な生活環境を背負っていると思います。その一つ一つから研究の実践と成果が放たれる。そうした研究成果について会員の皆様と対話を繰り返しながら、この学会の声を作り上げ、それを新しい世代の活動の中でさらに活性化していければいいなと思っております。

## 2021 年度九州アメリカ文学賞 結果および講評

銅堂 恵美子 (福岡大学)

### 九州アメリカ文学賞

該当者なし

### 佳作

川村真央 (九州大学大学院博士後期課程 3 年)

The Logicalized Freedom of Isabel Archer: Ratiocentrism in Henry James's *The Portrait of a Lady*

(講評)

本年度は 2 篇の応募がありました。2 篇の論文は意欲的な論文でしたが、審査の結果、残念ながら、どちらの論文も文学賞の水準には至らないという結果となりました。しかしながら、うち 1 篇については、効果的な論文構成と丁寧なテキスト分析を評価し、合議の結果、佳作といたしました。応募者には審査委員からの詳細なコメントを送付しておりますので、ぜひ今回の論文の書き直しに挑戦し、別の形で発表を目指して頂きたいと思います。過去 4 年間、2 篇の応募が続いておりますが、来年度はさらに多くの皆様からのチャレンジをお待ちしています。

## 地区だより

### 《沖縄地区》

加瀬 保子 (琉球大学)

今年は沖縄復帰50年にあたり、5月に開催された沖縄復帰50周年記念式典をはじめ、これまでの沖縄の歩みを振り返る節目の行事が数々行われております。ただ、オミクロン変異株が猛威を奮っており、最近イベントなどの開催にも影響を及ぼし残念です。急激な感染拡大で大変な夏となっておりますが、沖縄地区会員の最近の研究活動について、以下ご報告させていただきます。

琉球大学の喜納育江先生は、去る5月12-14日、ワシントン大学日本研究プログラムの招聘で、同プログラムが沖縄復帰50年にちなんで主催した Okinawa's 'Reversion' 50 Years On Workshop に参加して来られました。コロナの長引く影響のため、喜納先生にとっては2年半ぶりの渡米となりました。このワークショップには、アメリカ国内やイギリスから招聘された沖縄文学・文化研究者が参加され、大変刺激的な研究発表を行いました。久しぶりに対面での知的交流を体験され、喜納先生は大変有意義な時間を過ごされたそうです。(Okinawa's 'Reversion' 50 Years On Workshop のウェブサイトはこちらです。 <https://jsis.washington.edu/japan/okinawa-reversion/>)

加瀬は、昨年からハイポイント大学の Laura Alexander 先生の編著プロジェクト、*Women Writing Trauma in Literature* の中の一章を任せられ執筆に取り組んで参りましたが、最近ようやく完成することができました。章題は“Over the Father's Corpse: Subversive Daughters' Mimicry”で、フィリピン系アメリカ人作家 Jessica Hagerdon の作品 *Dream Jungle* に描かれている perpetrator trauma について、米西戦争、ベトナム戦争、そして9.11以降の War on Terror において繰り返し用いられたアメリカの「父なる救世主」としての自己表象に着目し論じました。こちらの編著は今年 Cambridge Scholars Publishing から出版される予定です。また、来年1月にサンフランシスコで開催される MLA 年次大会での発表も決定いたしました。ニューヨーク州立大学バッファロー校に留学していた折お世話になった Xiaojing Zhou 先生 (現パシフィック大学教授) と共に、アジア系作家の描く

自然災害や戦争などの人為的災害をテーマにしたパネルで発表いたします。尊敬する恩師と共に登壇できることは、大変感慨深いです。

## 《鹿児島地区》

千代田 夏夫（鹿児島大学）

鹿児島の先生方の動静をお便りいたします。生田和也先生（長崎外国語大学）が鹿児島を離れられたのは淋しいことでしたが、同じ九州ということでまたお目にかかれますことを楽しみにいたしております。今春より鹿児島女子短期大学には、松下沙耶先生が着任されました。先般の KALS 第 67 回大会では竹内勝徳先生（鹿児島大学）のご司会のもと、「黒人・女性・姉妹愛—*Plum Bun* に おける女性の連帯」を発表されたところでした。街中であって緑あふれる高麗橋たもとの学舎、ご教育ご研究にますます充実の日々をお過ごしのこととお慶び申し上げます。これからどうぞよろしく お願いいたします。

千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）のご論文「不況時代のアメリカ—『持つと持たぬと』の背景」が日本ヘミングウェイ協会編『ヘミングウェイ批評—三〇年の航跡』（小鳥遊書房、2022 年）に、「ヘミングウェイが描いたアメリカ—鉄道を中心にして」「あとがき—協会設立前の頃」が日本ヘミングウェイ協会編『ヘミングウェイ批評—新世紀の羅針盤』（小鳥遊書房、2022 年）に収められております。オレンジと青の装丁も鮮やかに、二巻同時に刊行された大部です、ぜひご覧ください。森孝晴先生（鹿児島国際大学）からは以下のお便りを頂戴いたしました。ご承諾を得て転載させていただきます。

…

昨年の 6 月 12 日に日本ジャック・ロンドン協会との共催という形で開催していただいた中・四国アメリカ文学会第 49 回大会で私の参加したシンポジウム「21 世紀から読み直すアメリカ自然主義文学」の報告が『中・四国アメリカ文学研究第 58 号』（2022 年 6 月発行）に掲載されました。

私は広島生まれということもありうれしい縁でしたので、シンポジウム後に中・四国アメリカ文学会に入会させていただきました。論文としては、ジャック・ロンドンの知人であった長沢鼎に関する「長沢鼎と磯長家」（『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第19集、2022年3月）と「薩摩藩英国留学生宛ての大久保利通らの手紙について」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第22巻、第4号、2022年3月）を書きました。研究ノートとしては、「ジャック・ロンドンと長沢鼎、その後」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第23巻、第1号、2022年6月）を出し、翻訳としては、教え子の遼寧対外経貿学院（中国の大学）講師劉鵬氏との共訳「ゴボトの一夜」（ジャック・ロンドンの短編）が同論集第23巻第2号に掲載される予定です。なお、近年に書きためた拙論をまとめて今年中に出版する予定で、すでに原稿の校正に入っています。

…

千代田は6月4・5日に遠隔開催されました日本比較文学会第84回全国大会のワークショップI「エドモンド・ウィルソンとその時代——批評の射程——」（4日開催）にて、「エドモンド・ウィルソンにおける〈民族〉の一例—F・スコット・フィッツジェラルドのアイランド性をめぐって」という話をさせていただきました。

## 《熊本地区》

楠元 実子（熊本高専）

コロナ禍は回復の兆しを見せたと思ったら、一転して第7波で感染者数の最高を更新するなど、一進一退が続いています。熊本アメリカ文学研究会は、ハイブリッドでの例会が続いています。高齢化が進んでいるメンバーの皆が再び対面で会えるのはいつのことでしょう。さて、前回以降の研究会の活動を報告致します。

○ 第156回（2022年2月19日）Zoom/熊本大学にて

題 目：「劇小説」*Burning Bright*（1950）におけるスタインベックの創作過程——善と悪の葛

藤

発表者：馬渡 美幸

司会者：池田 志郎

\*John Steinbeck の劇小説 *Burning Bright* について、馬渡先生の丁寧な読みとご発表を楽しみました。スタインベックの人間観や家族の在り方、罪の意識という角度から解釈されました。作家自身の離婚、自分の子供が自分と血がつながっているのかという作家の悩みなどが下敷きになっているという話もあり、短い作品をより深く味わうことができました。人間が抱えている悩みや逞しさなど、現在につながるテーマでもありました。

○ 第157回（2022年4月23日）Zoom/熊本大学にて

題 目：新しい英語小説 *Normal People* を読む

発表者：池田 志郎

\*今回は珍しくアイルランドの作家 Sally Rooney の作品となりました。アイルランドの若者二人の高校、大学時代における成長と恋愛の小説ですが、二人の関係性や階層の違い、家庭環境と成長のかかわり、誤解やすれ違いなどを池田先生が詳しい解説で読み解いて下さいました。痛々しさを伴っているかのような自分探しや、作家自身のマルクス主義の思想、タイトルの解釈についてなど、活発に意見交換がなされました。

○ 第158回（2022年6月18日）Zoom/熊本大学にて

題 目：ロバート・F・ヤング作「たんぽぽ娘」の面白さ

発表者：池田 志郎

\*Robert F. Young の短編小説 *The Dandelion Girl* について、再び池田先生にお話をいただきました。最後にパズルがはまるかのようにきれいにまとめられた内容や構成について説明があり、日本人の感性にも合うさわやかなロマンスであることに気づくことができました。本文で呪文のよう

に繰り返される"Day before yesterday I saw a rabbit, and yesterday a dear, and today, you."について、皆から様々な解釈が飛び出し、短編ならではの面白さを堪能しました。

なお、次回の会（内容未定）は9月に予定されています。ご関心がある方は、メールにて楠元 (kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp) までご連絡ください。

## 《佐賀地区》

鈴木 繁 (佐賀大学)

先回の地区便りで、佐賀大学における英米文学系の教員が3名しかおらず、レッド・データ・ブックに登録間近であると書きましたが、これ以上、落ちようがないくらい落ちると、後は浮上するしかないということか、その後、うれしいことが二つありました。

一つは、大学執行部は何を血迷ったのか（心を入れ替えた？）、教育学部英語科で文学の教員を採用することが認められ、現在公募中です。専攻分野はアメリカ文学、イギリス文学を問わず、広く英語文学ということになっています。ポジションは講師あるいは准教授ということで、比較的若い人を想定しています。詳細は佐賀大学のホームページをご覧ください。但し、佐賀大学では公募にしょっちゅう失敗していますので、採用にまで至るかは、保証の限りではありません。

もう一つは、全学教育機構において、新たにお一人の先生をお迎えすることができました。主たるご専門は英語教育ですが、お陰様で、全学の教養教育を担う英語専任教員数は一気に1.5倍に跳ね上がりました。とはいえ、1学年1,300名近くの学生に対し、専任教員が2名から3名に増えたというだけのことで、授業を非常勤の先生方に頼り切っている現状に変わりはありません。佐賀まで遠路はるばる教えに行くことも厭わないという先生がおられましたら、お知らせいただければ幸いです。自薦・他薦ともに歓迎いたします。連絡先は以下の通りです。

[suzukis@cc.saga-u.ac.jp](mailto:suzukis@cc.saga-u.ac.jp)

但し、講義手当を含む労働条件は、他大学と比べても、最低・最悪です。おまけに、来年はもう



来なくていいと、いつ言われるか、知れたものではありません。

次回の地区便りで、皆様にうれしい報告ができますことを祈ってやみません。

## 《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

北九州地区からは、まず北九州アメリカ文学研究会の活動をご報告します。今回も、研究会の薬師寺元子先生より直接次のお便りを頂戴しました。

北九州アメリカ文学研究会の活動 について2件ご報告します。

### （1）第17回研究発表会

日時：2022年3月5日（土）14:00～17:00

会場：北九州市立大学 北方キャンパス内

#### 【研究発表1】

題目： 「トウェインが描きたかった故郷の情景」  
——ハックルベリーフィンの冒険——

発表者：谷山 知子氏（福岡教育大修士修了）

司会： 村橋 素行氏（西南女学院大学元教授）

#### 【研究発表2】

題目：「ボストン近郊の文学巡礼と鳥たち」

発表者：村田 希巳子氏（北九州市立大学非常勤講師）

司会：上野 立架子氏（折尾愛真短期大学）

前半は、新進気鋭の研究家、谷山知子先生が、マーク・トウェイン作の『Huckleberry・Finn の冒険』から、Twain が描きたかった故郷の情景について、後半は、ベテランの村田希巳子先生が、Boston 近郊の文学巡礼と野鳥についてご発表下さいました。コロナ禍にも関わらず沢山の会員が参加し、和気あいあいとした雰囲気の中にも、鋭い質問が飛び交い知的好奇心を満たしてくれる密度の高い研究発表会になりました。

### （2）『北九州アメリカ文学』（Kitakyushu American Literature）第8号

2022（令和4）年4月30日発行

新型コロナ感染拡大の為、『アメリカ文学研究』第8号の刊行が一年間延期になり、大変残念でしたが、今なおパンデミック下にも関わらず、このように会誌発行が実現可能となりましたことを編集委員長の乗口眞一郎先生をはじめ編集委員の皆様方のご尽力に感謝申し上げます。

2022年8月9日 薬師寺 元子

齊藤からは次をご報告いたします。日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部3月例会のシンポジウムが3月26日(土)にオンラインで開催されました。題目は「ホーソン作品から考える、ウィズコロナ・アフターコロナの人、物体、環境の関係性」、登壇者は竹内勝徳先生(鹿児島大学)、青井格先生(近畿大学産業理工学部)、竹井智子先生(京都工芸繊維大学)、齊藤でした。また秋冬号でご紹介したSDG5(Gender Equality)に関わる北九州市立大学学長選考型研究費によるプロジェクト「国際的な取組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等(SDG5)の推進」も2年目を迎え、新しい取り組みを推進中です。特にご報告させていただきたいのは、プロジェクトの協力学生による国際学会ポスター発表の入賞と、学生企画イベントの開催です。前者ですが、プロジェクトで行った大使館や女性リーダーからの聞き取り調査の結果をまとめ、昨年度3月、国際学会のポスター発表部門で学生が報告しました。3位に入賞し、発表した学生はもちろん、関係教員にとっても大きな励みになりました。また7月2日~23日に開催されたムーブフェスタ(北九州市立男女共同参画センター・ムーブ主催)の期間中の7月16日に、数カ月にわたって準備した学生企画「若者と描こう!ジェンダー平等の未来予想図∞」を無事に開催いたしました。運営委員の学生が全力投球し、盛りだくさんのイベントになりました。また齊藤の方で、日本英文学会全国大会において口頭発表の機会をいただくとともに、高野泰志先生、竹井智子先生編著の『テキストと戯れる——アメリカ文学をどう読むか』(松籟社、2021年)の書評を日本ナサニエル・ホーソン協会の機関誌『フォーラム』に寄稿しましたことを書き添えさせていただきます。

## 《9月例会のお知らせ》

永川とも子(九州大学)

日時: 2022年9月3日(土) 13時00分から 17時00分

場所: Zoom会議

接続先 URL、ミーティング ID、パスワードは例会前日に KALS のメーリングリストを通じてお知らせします。

**[研究発表]** 13 時 10 分から 14 時 10 分

発表者：ダン・グレゴリー（宮崎国際大学）

"The Quiet Accomplishment of Cid Corman"

司会：藤野功一（西南学院大学）

**[ワークショップ]** 14 時 20 分から 16 時 20 分

「科研費共同研究キックオフワークショップ 19 世紀アメリカにおける可傷性の文学的表象」

司会兼発表者：生田和也（長崎外国語大学）

発表者：高橋愛（岩手大学）

：小宮山真美子（国立長野高専）

討論者：竹内勝徳（鹿児島大学）

### 事務局からのお知らせ

大島由起子（福岡大学）

事務局が福岡大学に移ってき（てしまい）ました。皆様、何卒よろしくお願ひ申し上げます。そそかしい私としては不安ですが、事務局長を務めさせていただきます。会計は高橋美知子先生、九州アメリカ文学賞担当は秋好礼子先生にお願いすることになりました。

私事で恐縮ですが、書評を書くべく、目下、メルヴィル研究者の中心といえる John Bryant による 2 巻本で、*Typee* 出版までの若きメルヴィルを扱った *Herman Melville: A Half Known Life* (2021) に取り組む日々です。この評伝は、新しい情報満載で、政治も美学も心理洞察もユーモア分析もバ

ランスよく取り入れていて、決定打となりそうな予感がします。本のレベルが高いのに、“go-off impulse”、“adrenaline-injected” Herman とか、面白い表現が時々出てきて、不思議と読みやすいです。このところビールのせいで太目の私ですが、本書の内容を何とか“under my belt”（これもブライアント好みの表現）にしようと頑張っております。皆様にとっても良い本との出会いに満ちた日々でありますよう。

### 《2022 年度役員・委員名簿》

会 長	<u>竹内 勝徳</u> (鹿児島大)
顧 問	安河内 英光
	山里 勝己
	小谷 耕二
	早瀬 博範 (宮崎国際大)
事 務 局 長	<u>大島 由起子</u> (福岡大)
幹 事	<例会担当>永川とも子 (九州大)
	<u>&lt;例会担当&gt;鈴木 一生</u> (九州工業大)
	<大会担当>高野 泰志 (九州大)
	<u>&lt;九州アメリカ文学賞担当&gt; 秋好 礼子</u> (福岡大)
	<ニュースレター担当> 江頭 理江 (福岡教育大)
会 計	<u>高橋 美知子</u> (福岡大)
監 査	長岡 真吾 (福岡女子大)
編 集 委 員 長	<u>前田 譲治</u> (北九州市立大)
本 部 代 議 員	<u>竹内 勝徳</u>
	<u>大島 由起子</u>

本部大会運営委員 千代田 夏夫 (鹿児島大)

本部編集委員 (支部選出) 永尾 悟 (熊本大)

本部サイト運営委員 生田 和也 (長崎外国語大)

編 集 委 員 前田 譲治 (北九州市立大)

齋藤 園子 (北九州市立大)

肥川 絹代 (近畿大)

高橋 勤 (九州大)

Greg Bevan (福岡大)

Wayne Arnold (北九州市立大)

地 区 委 員 齊藤 園子 (北九州市立大)

鈴木 繁 (佐賀大)

山田 健太郎 (県立長崎シーボルト大)

楠元 実子 (熊本高専)

雲 和子 (大分大)

井崎 浩 (宮崎大)

千代田 夏夫

加瀬 保子 (琉球大)

支部サイト運営委員 藤野 功一 (西南学院大)

## 編集後記

KALS 会員の皆様、お待たせしました。NEWS LETTER65 号をお届けします。竹内先生、大島先生をはじめ、原稿をお寄せくださいました皆様に、心からお礼を申し上げます。

ニュースレター担当 江頭 理江 (福岡教育大学)